もあるようだ.「ほとんどが道端で撮ったものだ」というが,調査研究をいくらやったとしても,これだけの花を目にすることはできないのだから,著者の健在を祈って次の一冊も期待する. (金井弘夫)

□伊藤ふくお(北川尚史,監):**どんぐりの図鑑** 79 pp. 2001. ¥2,800. とんぼ出版.

著者は昆虫写真家.ゾウムシの食餌となるドングリについて,一粒からでも同定できるように,その各部を詳細に写真に収めたとのこと.だから説明も,ドングリについてだけ書いてある.その上で,実生,花,葉,冬芽,木肌を取り込んで見開き2頁に一種を納め,*Quercus*, *Lithocarpus*, *Castanopsis*, *Castanea*, *Fagus* と,日本産22種が同じ形式で示されている.すべての種類を同じ形式で見られることは,見る方から言えば大変ありがたいことだが,作る方にすれば大変な苦労があったに違いない.巻末にはドングリばかりすべて比較できるように,前の図鑑の部分とは異なるアップの影像が並び,その上冬芽と落ち葉の比較影像も続いている.この本は好評だったようで,初版が12月なのに,翌年の3月には第3刷が発行されている.総合的な植物図鑑は山ほど刊行されているが,そろそろこういうモノグラフ的な図鑑(たとえばモミジ)が作られてもよい時期に来ているのではないだろうか. (金井弘夫)

□酒井聡樹:**植物のかたち**. 258 pp. 2002. ¥2,300. 京都大学学術出版会.

植物の形の数理モデルを,進化的意義にからめて研究している著者が.研究者としての自己が形成されてゆく過程を物語っている.序文にあるように,研究の学問的解説をしようというのではない.大学院への入学から,研究テーマの模索,修士論文,研究誌への投稿,博士論文と時間を追って,周囲の仲間の批判をうけながら成長して行くあり様が記されるのだが,その書きぶりがなんだか楽しそうで,つい読まされてしまう.あちこちに数式が出てくるが,これは読み飛ばしても筋を追うのに差し支えないし,律儀に理解しようとすれば,もちろん勉強になる.かつて故井上 浩氏が,若くして「コケに魅せられて」という本を出版し,これが後のコケ学徒のさそいこみに大きな影響があったことを思い出す.著者の研究テーマとは関係なく,「何かをしたい」と思っている学生さんにすすめたい. (金井弘夫)

□広松由希子(文),大森雄治,ヴイジュアルフォークロア(写真):**せいたかだいおうーヒマラヤのふしぎなはな** 28 pp. 2002. ¥410.

福音館書店月刊かがくのとも8号(通刊401号)と奥付にあり,子供むけの「はじめてであう科学絵本」のシリーズである.*Rheum nobile* の迫力あるカラー写真,その芽生えから次第に大きくなって花が咲いて枯れるまでを,言葉少なく物語っている.かわった形の古生物や動物の写真は見飽きるほど出回っているが,植物のはなかなか無い。あったとしても「きれいな花,珍しい花」としてしか提示されず、本書のように生活史をふまえた見せ方はどうもしてもらえない.ヒマラヤでの植物調査の成果が,こうして子供むけにまで披露されるのは歓迎される.日本の植物でも,こういう見せ方をする余地が,まだ大いに残っているだろうと思う.

(金井弘夫)

□小川 潔,倉本 宣:**タンポポとカワラノギク** 146+7 pp. 2001. ¥1,900. 岩波書店.

環境保全や自然保護問題でよく話題にあがるこの二種を永らく研究している著者らが,第一部,第二部でそれぞれの種類の研究の経過と展望を語る.第三部は林 良博,武内和彦両氏をまじえた討論で,市民運動を含めた環境問題との取り組みが議論されている.保全生物学の一面を知るのによい読み物である.ただ一つ引っかかったのは,先年行われた環境庁の「身近な生き物調査」の結果は「きちんとした統計処理をすれば,誤った情報を排除できるとの確証を得た」ので「このデータは使える」と結論されていることで,「エッ?」と思ってしまった.あのデータはそういう検討の対象にされたのだろうか?

(金井弘夫)